

第三一回 光華講座

唯識と聞法

大谷大学教授

小谷 信千代

はじめに

こんにちは。よくおいで頂きました。ただいま、所長さんから過分なご紹介を頂きましたが、話をし始めますと次々とボロを出しますから、そうでないことはすぐにお分かり頂けます。

講題に掲げさせて頂きましたように、本日は「唯識と聞法」という題でしばらくお話をさせて頂きます。

「唯識」というのは、今、ご説明頂きましたように「瑜伽行」、ヨーガをする時の理論とでもいうべきものです、どのようにヨーガをするか、その理論が「唯識」ということです。何故「瑜伽

「行」をするかといいますと、釈尊のお説きになった教え、「法」をいかに正しく聞き取るか、法を正しく聞き取るための修行が瑜伽行です。教えを聞くということは一見簡単なようですが、実際は難しいことです。釈尊が意図された通りに聞き取るということは易しいことではありません。わたしたちはいろんな思いをもって話を聞きますから、釈尊が言おうとされた真意を聞き取るためには、思い込みを離れないと聞き取れないというように「瑜伽行」をする人は考えたわけです。そのために思い込みを離れる「行」をしなければならぬと考えたわけです。わたしたち、真宗の者にとっては「聞法」をすることが大事なことです。私が専門として「唯識」という立場から「聞法」ということを考えれば、どういうことになるかということ。今日はお話しさせて頂こうと思っています。

インド仏教史概略

——原始仏教

まず、「唯識思想」というものがどういう思想であるかということをお分かり頂くために、インドの仏教の歴史の流れをざっと追ってみたいと思います。お手許のレジメをご覧ください。まず最初に「原始仏教」と記しています。それは釈尊がおいでになった時代、およびその直接のお弟子たちがおいでになった時代を「原始仏教」の時代と申します。釈尊が亡くなると、数

十日のうちに仏典が「結集」されたと言われます。経と律とが纏められました。それは、釈尊の教えを正しく伝えていくために為されたことです。以後、教えをどう正しく伝えていくか、教えをどう正しく聞いていくかということが、「仏教」の歴史を形成していくこととなります。

――部派仏教

その次に「部派仏教」の時代となります。釈尊がお亡くなりになって百年ほど経つと教団が分裂します。まず二つに分かれます。なぜ分裂したかと言いますと、やはり「教え」をどう受け止めるかということが元になっていると思います。それは戒律をめぐって、釈尊が定められた戒律をそのまま保つていかないといけないと考える人たちと、釈尊自身が「小さな戒律ならば時と場合によってはゆるめてもよろしい」というようにおっしゃっているのです。戒律はゆるめてもいいのだというように考える人たちとの間で、意見が対立して分裂したのであると言われています。そこにも釈尊が説かれたことをどう受け止めていくかという問題がやはり出てきていると思います。考え方を異にする人たちが二つの部派に分かれたと言われています。それが釈尊が亡くなって百年ほど経った頃のことです。それ以後、更に分裂を重ねて、結局一八から二〇の枝葉の学派あるいは部派に分かれたと言われています。

以後それらの学派あるいは部派の中で「仏教」が学ばれていくこととなります。そういう時代が始まっていきます。そういう時代の仏教のことを「部派仏教」の時代と言います。そういう時代がしばらく続きますが、やがて釈尊が亡くなってから四百年ほど経った時代に、「部派仏教」

の仏教の学び方が「釈尊が意図されたこととは違う学び方になっているではないか」というように考える人たちが出てきてきます。どうすれば釈尊が本心に言おうとされたことを正しく受け止めることができるか、ということを考える人たちが出てきました。

そして、それまで伝わってきたお経をもう一度読み直そうという運動が出てきます。それまで伝わってきたお経は「阿含」とか「原始経典」と呼ばれます。今でもセイロンやビルマやタイなどの東南アジアの国々に行くと、黄色い衣を着て戒律を守って托鉢して歩いておられるお坊さんたちがおられるでしょう。そういうお坊さんたちが唱えておられる、お読みになっているお経、それが「原始経典」です。そのお経をもう一度読み直して、釈尊が本心におっしゃりたかったことをそこから掘り起こそうという運動が起こります。そうやって釈尊が本心におっしゃりたかった思いを「宗教文学作品」として唱えだしていった、語りだしていった人たちがいました。それを「大乘仏教」と言います。

——大乘仏教

そうやって新たな経典が、釈尊が亡くなってから四百年ほど経った頃にどんどん生まれてきました。それが「大乘経典」で、日本で唱えられているお経は全部その時以後に作られたものです。そう言う、「お経は全部、釈尊が直接お説きになったと言われているじゃないか。大乘経典も釈尊直接の説法ではないのか」といぶかしく思われるかもしれませんが、大乘経典は直接お説きになったものではありません。直接お説きになったものを纏めたものは、「原始経典」と呼

ばれるグループのお経で、今ほど申し上げたタイやセイロンやビルマや、そういうところで唱えられている経典が「原始経典」のグループのお経です。それとは違う、ずっと後になって出てきたのが「大乘経典」です。天台宗でお勤めになる「法華経」、東大寺で学ばれている「華嚴経」、わたしたち真宗門徒の者がお勤めする「浄土三部経」、真宗以外のほとんどの宗派で唱える「般若心経」、みなさんが日頃耳にされるお経は全部「大乘経典」です。釈尊が亡くなって四百年ほど経ってから出てきた、生まれてきた経典です。しかし、それはある意味では、今申し上げたように釈尊が本当におっしゃりたかったことを、それまで伝わってきっていた経典の中から掘り起こして纏められたものです。従来の経典を深く読み込んで、そこから「ああ、これこそ釈尊が本当におっしゃりたかったことなのだ」というようにしてインドのお坊さんたちが汲み取ってできたお経ですから、そういう意味で大乘経典も「釈尊がお説きになった経典」なのです。

昔であれば、たぶん私が今申し上げたようなことを言いますと、本願寺から僧籍を剥奪すると言われたことでしょう。実際、村上專精という、東京大学のインド哲学科の教授であり、東本願寺のお坊さんでもあった人がおられました。その人は本願寺から僧籍を剥奪されています。

大乘仏教が起り、その中から色々な大事な思想が生まれてきます。紀元一、二世紀くらいには、「正信偈」に「龍樹大士出於世」とうたわれる龍樹菩薩がお出ましになります。龍樹菩薩は「空」の思想を説いた人です。「空」というのはどういうことかと言いますと、「部派仏教」の代表的な部派である有部の人たちは、釈尊がおっしゃりたい意味は、お経の中の言葉に全部込められている、お経の言葉の中に含まれていると考えます。そういう意味で「有」ということ、「有

の思想」を主張しました。龍樹菩薩はそういう考え方を「有見」とお呼びになつて否定されます。有部の人々は、釈尊の本当におっしゃりたいことは、お経の言葉の中に全部含められて存在しているのだ、あるのだと考える。「小乗仏教」のお坊さんたちは、学問をして言葉を徹底的に勉強すれば、釈尊が言おうとされた意味が正確にわかつて悟りが開けるのだと、そう考えるわけです。言葉と意味とが直結しているのだと、そう考えるのです。經典の言葉の中へ釈尊の言いたいことが全部含まれて「有る」からこそ一生懸命勉強するわけです。勉強することに意味があるわけです。

しかし、龍樹菩薩からすれば、言葉はあくまでも釈尊がおっしゃりたいことを指し示す指のよなものだというわけです。そういうことを昔から「指月」と言います。ここ数日お月さんがキレイですね。お月さんがキレイですから、子どもなんかを連れて、お月さんが出てるね」と、山に上がりかけた頃に子どもに言います。子どもはお月さんが出ていると言われて、頭の上を見ますが、まだ山の上の辺りにありますから見えません。そうする大人は、お月さんはあっち」と、その方向を指し示しますね。指で指し示します。子どもは「あっち」ではなく「指の先」を見ます。そんな落語がありますね。小僧さんがお使いを頼まれて、大阪で「どこそこへ行け」と言われて探し回って行ってみる。だいたい近いところまでようやく辿り着いて、「ここらへんやと思うけども」とか言つて、通りすがりの人に「どこそこというところ知ってまっか」とたずねます。すると聞かれた人が「あっちやがな」つて指し示します。「え、どこでっか」「あっちや言うてんのにわからんのか、指でさしてるやろうがな」「あっちつて、どこでっかいな」「指の先、見ん

かいな」「え、指の先でつか。汚い爪でんなあ」「爪を見てどないすんねん。違うがな。指で指している先を見るのやがな」という、そんな落語があるでしょう。

指の先端を見ても、そこに指し示されているものはありません。指の指し示している所を見ないと意味がありません。言葉というものも同じことです。言葉はあくまでも言いたいものを指し示す手段、方便です。なのに、手段や方便だけを勉強して手段や方便がわかったら目的は達したと勘違いしている。「小乗仏教」の部派仏教の人たちの学問もそれと同様で、言葉がわかれば悟りが開けるかのように思い込んでいる、というのが龍樹菩薩の非難されるところです。

だいたい勉強しているとそうなり勝ちです。「私はわかつている」。私にもそういうところがありません。本当の所はわかつていないのに、言葉がわかるとお経の言わんとしていることは全部わかったつもりになります。皆さんも気をつけてください。こんなところに勉強しにきておられると大変なことになりますよ。「私は仏教がわかつている」と言い出されるようになると危険です。わかっていると言う人ほど扱いにくいものはないでしょう。「ほんまかいな」と思いますからね。どこがわかっているのかなってね。私の学生も、きっと私を見てそう思っていることでしょう。「先生、わかっけないのと違うかな、わかっいたらもうちよつとまともな行動をしそうなんや」と思っているといます。

「言葉」がわかると「言葉」で語ろうとしていることがわかったような錯覚に陥ります。勉強すればするほどそうなります。そういう間違った考えを龍樹菩薩は「有見」と言われたのだと思います。「有」という考え方です。これは私の独自の理解の仕方もしれません。普通は「物が

ある」と一方的に考える考え方を「有見」と言うのですが、私はそういう捉え方だけでは仏教の歴史を正確に捉えられないのではないかと思っっているのです。

「有」という考え方の一番根本的なところは、言葉の中に、それが言おうとしている意味が全部込められている、言葉がわかれば意味が理解できるのだと思ひ込むことだと考えています。それが「有見」の一番危険な所だろうと思っっているのです。それを龍樹菩薩は批判しておられるのだと思います。そういう勉強の仕方では、釈尊の言っっていることはわからないと批判されたので強している人たちは、それを誤解してしまいます。釈尊が言おうとしたことが「言葉」の中に込められていないのであれば、「言葉の勉強」＝「經典の勉強」をいくらしたって意味はないではないか、というところまで極端に行っってしまったのです。經典を勉強することには意味がない。所詮、經典が本当に述べようとしてる意味は「言葉」を越えているのだから、学問は意味がないではないか。自分で独自に悟ったほうがよいではないか、言葉の勉強は無駄だということになっってしまったのです。

「有見」に陥っっていたのは有部の人たちです。有部の学問は「有見」に陥っっていました。それを訂正しようとして、龍樹菩薩は「空」ということを言おうとされました。經典の意味は「言葉」通りには存在しない、それが「空」ということなのです。そういうことを「空」ということでおっしゃりたかったのですが、それが誤解されました。「言葉」の中に意味は含まれていないから「言葉」をいくら理解しても空しい。「無」であるというように誤解されました。そういう

努力は「無」に帰してしまうのだという考え方が出てきました。それを「無見」と言います。それが龍樹菩薩の後継者中観学派の人々の陥った過ちでした。

それを乗り越えようとして出てきたのが唯識学派です。「有見」と「無見」という両極端の過ちを乗り越えるにはどうすればよいか、仏教を学ぶことに改めて意味を持たせるにはどうすればよいか。仏教を学ぶことの意味づけをどうすれば実現できるかを考えて出てきたのが瑜伽行唯識学派の人たちです。「有見」と「無見」のどちらにも囚われないで經典の意味を正しく把握するために考え出されたのが「唯識」という考え方です。私が見たり聞いたりする全ては私の心の現し出したものである、真実は決して私が見たり聞いたりする通りには存在しないというのが、「唯識」ということの意味ですが、「唯識」であるということをしつかりと心の中心に据えてお経の語ろうとする真実を聞き取っていく、そして自分の心の中へしみ込ませていく。釈尊の本当におっしゃりたかった意味を「唯識」という方法で心の中にしみ込ませていく、その実践法が「瑜伽行」というやり方です。唯識説からする聞法の意味を今日はお話し申し上げたいと思っています。

唯識学派の学匠

まず、伝説としては「弥勒」という方がおられて、その方が無著や世親という人たちに、「唯識」の理論を教えられたというように言われていますが、歴史上の実在の人としてはそこに挙げ

ていますが、無著と世親という方が四、五世紀に出られた人として知られています。

無著は、「瑜伽師地論」という漢訳で百巻からなる膨大な書物を編纂しています。玄奘三蔵という、「大唐西域記」という旅行記を書かれて、後に孫悟空の三蔵法師のモデルになったお坊さんがおられました。唐の時代に、中国からインドへ仏教を求めてはるばる、十七、八年もの歳月を費やして留学をされました。玄奘三蔵はこの「瑜伽師地論」を求めてインドに行かれたのだと言われています。

「瑜伽師地論」はその時代にはまだ中国に一部しか伝わっていませんでした。「瑜伽師地論」というのは、坐禅をするための指導書です。坐禅の方法が非常に詳細に説明されています。「瑜伽師地論」はいっぺんに完成したのではなくて、長い間に多くの人が作った幾つかの部分が残っていて、それを全部纏めたのが無著であると言われています。無著は今日使うテキスト「撰大乘論」の著者でもあります。

その弟にあたるのが世親です。天親菩薩、「正信偈」で親鸞聖人が最も尊敬する人の一人として挙げておられるのがこの天親菩薩です。親鸞の「親」という字は天親の「親」に由来すると言われています。「鸞」は、この天親菩薩のお書きになった書物を註釈している人に、曇鸞という中国のお坊さんがおられますが、その「鸞」をとったものと言われています。天親菩薩は、「俱舍論」という「小乗仏教」の教義の綱要書を書いておられます。その研究が私のライフワークの一つでもあります。その天親菩薩は「唯識三十頌」という「唯識」の書物をも著わしておられます。それをインドの護法という人が解説を書いて、先程申し上げた玄奘三蔵が翻訳をされた

「成唯識論」という書物があります。

奈良へ行かれたら、法隆寺、あるいは興福寺というお寺があります。法隆寺、興福寺、清水寺などのお寺は学問寺です。学問をされる宗派ですね。そこで何をされているかと言うと、玄奘三蔵が漢訳された「俱舍論」と「成唯識論」をテキストにして学問をされています。昔の人は漢訳でやりましたが、それをサンスクリットやチベット語訳のテキストを用いて研究しようというのが私の仕事です。

心の働き

「仏教」では「心の働き」を普通は、六つ数えます。「六識」と言います。目で見る「視覚」のことを「眼識」と言います。耳で聞くことを「耳識」、鼻で匂いをかくことを「鼻識」、いろんなものを味わう「味覚」を「舌識」と言います。皮膚でいろんなものを感じます。すべすべしているとか、温かいとか冷たいとか、それを「身識」と言います。いろんなものを判断したり認識したりします。それを「意識」と言います。六つありますので六識と言います。唯識学派以外では、心の働きとして六つだけ、六識だけを認めています。唯識学派だけが、六識以外に「マナ識」という識と「アーラヤ識」という識との存在を認めます。そういう心の働きがあるのだと考えます。マナ識というのは自我に執着する心、自我執着心のことです。「我執」を起こす心。それからアーラヤ識は「蔵識」とも呼ばれます。

アーラヤというのは、みなさんご存知のヒマラヤ山という山があります。あれは正しくは「ヒマ・アーラヤ山」です。「ヒマ」というのは「雪」という意味です。「アーラヤ」は「蔵」です。ヒマラヤというのは七、八千メートルもある山ですから、年中、雪がずっと溶けないではありません。冷蔵庫みたいなものです。「雪をずっと持っている山」で「ヒマ・アーラヤ」と呼ばれるのです。「アーラヤ」は「蔵」という意味です。物をしまっている「蔵の識」で、「アーラヤ識」と言います。六識にマナ識とアーラヤ識とを加えて、唯識学派では全部で八種類の心があると言います。

まず、マナ識を説明します。「自我執着心」というのは所謂「自意識」とは違います。自意識は、自分が自分自身を意識していることで、それは意識できます。自分で自分のことを意識しているということは自分で認識できます。「自意識過剰」と言ったりするでしょう。いつも自分のことをみんなが見ていると思わないでおれない人がいます。そういう人を「自意識過剰」と言うでしょう。他人の話をしてるのに「オレのことゆうてるんちゃう？」なんかゆったりしてるでしょう。女の人の方が多いかもしれませんね。特に美人の話をしていたら「あら、それ私のこと？」などと横から言ってきたりしますが、そういうのを「自意識過剰」と言いますね。しかし、そういう「自意識」のことをマナ識と言うのではないのです。マナ識というのは、その働きが意識できない、認識できない意識下の心の働きであると説明されます。その働きが意識されなければ、常に自分を捉えている、自分のことを他のものと区別している心の働きがある、と、いうように考えるのです。

例えば、いま私が「花だ」と考えるとします。「花だ」と考えている時に、私は自分のことを意識しているつもりはありません。「これは花だ」と思う時に、その一方で自分を認識したりはしていません。「花があるのは自分があるからだ」などとデカルトみたいなことをいちいち考えてはいません。「花だ」と思った時には花のことしか思っていない。自分のことは認識していませんが、唯識学派の人は「花だ」と思った瞬間に、実は心の奥深いところで自分というものを認識しているのだというように考えるのです。それは何故かという、花は自分とは違うものとして認識しているから「花」として認識されるのだと言うのです。花を自分と区別している。「花だ」という認識が働いた時には、自分というものとは違う存在として「花だ」と認識している。だから意識はしていないけれども、心の奥深いところで自己というものを無意識のうちに認識していると言います。自分とは別のものとして、花を認識しているとそういうふうに見えるのです。

何故マナ識などという存在を考えるかという、**「自己執着心」「我執」というものが、極めて根深いもの**だということを知らせたいのだと思います。わたしたちの**「自己」**を捉える心が、いかに根深いものであるかということが言いたいのです。**「自意識」**を離れなさいとか、**「我執」**を離れなさいとか、自分の思いを離れなさいと言いますが、容易に離れることはできません。

例えば、親というもの。私も二人の子供の親ですが、自分の子どものためと思って、いろんなことをやってきました。大体それは失敗してきましたが。あんまり考えないほうがいいのかなと最近では思ったりしておりますが。子供が小さかった頃、私も家内も、子どものため、子どものた

めと思って一生懸命考えて、失敗してきたことが多いように思います。その時は子どものために、自分のためではないと考えてるつもりだったのですが、しかし、子どものためと思いながら、やはりどこかで自分というものを捨てきれない。子どもがちゃんとしてくれないことには自分も安心できないし、年取っていけないし、あるいは世間からいつまでも「あんたんとこの坊ちゃん、フラフラして」と言われても困るというように、自分のことを思ってるところがあります。そういう思いはなくすることはできない。家内にも「そんなに子どものことばかり考えないでいいから」とよく言ったことがあります。しかしそう言われたからといって、子育ての最中にある家内に、子供のことを考えることを止めることが出来るはずありません。彼女の中にも、子供に対する心配と共に、自分の世間に対する思いがあるから、子供のことを心配しないわけにはいかないということがあるからです。そういうような思いは、いくら私たちが抑えておこう、自分に執着するのは止めておこうと思っても、なかなか抑えること止めることはできないものです。それが何故できないか。それをその根底にマナ識があるからだと言識説は教えるのです。マナ識はわたしたちが寝ていようが、気絶をしていようが、無意識の状態にあっても、ずっと働き続けていると言識説は言います。それほどマナ識というものには根が深い。だからわたしたちは我執から逃れることはできないのだと、我執の根深さをマナ識の存在を教えることによってわからせようとしているのです。

アーラヤ識

マナ識は七番目の識で第七識と言われますが、それより更に深いところにあるのが「アーラヤ識」です。唯識学派では、わたしたちが見ているこの全ての存在、全てのはアーラヤ識がそういうものとして現し出したのだと言います。今、こうやって花を見ていますが、私が見ている花と皆さんがご覧になっている花とは、唯識学派から言わせれば、それぞれ違うということになります。みんな同じものと同じように見ているというようにわたしたちは思いますが、そうではない。いま私が見ているのは、小谷のアーラヤ識が現し出した花を見ているのだと言います。皆さんお一人お一人がご覧になっているのは、みなさんお一人お一人がご覧になっている花なのであって、隣りの人と同じ花をご覧になっているようだけれども、違う花を見ておられるのだと言います。

アーラヤ識は「無始時來の界」とも呼ばれます。「界」は「アーラヤ識」のことを意味しています。「無始時來の界は、一切法の等しき依たり。これに由りて諸趣とおよび涅槃の証得とあり」というように、「撰大乘論」では「阿毘達磨大乘經」という經典から引用して述べています。仏教では、わたしたちは大昔から今に至るまで輪廻転生、生まれ変わり死に変わりして、今ここにいるのだというように考えます。それは仏教だけではなく、古代のインド人は普通そういうように考えていたようです。今でもインドへ行きますと、輪廻転生、生まれ変わり死に変わりすると

いうことを、おおかたの人が信じているように思います。

ブータンという国に行ったことがあります。大学の研修で行ったのですが、チベット仏教の国です。その時、若いガイドさんと話しをしていますと、朝晩ちゃんと仏様にお参りをすると言いました。昭和天皇がお亡くなりになった時に、いろいろな国から弔問客が来られたでしょ。その中にブータンの国王が来られていました。民族服を着て、丹前みたいなのを着ておられました。日本の和服と同じようなものを着ておられて、下はズボン（半ズボン）を履いて、そして長いソックスのようなものを履いて来ておられたのを覚えています。私はチベットの文化に関心がありますから、「ああ、ブータンの国王が来ておられる」と思っていて見っていました。キレイな民族衣装を着ておられました。そのブータンに行きますと、ブータン人の青年、三〇歳前後の人だったと思います。ツアーのガイドをしてくれました。彼と話をしていますと、彼は毎日仏様にお参りするという話をします。ブータンの民家の仏間に入らせてもらったのですが、八畳から十畳くらいあるような一間が、全部仏間になっていました。正面が全部仏壇になっていました。中国に行かれたら赤や緑で柱などが塗ってあるでしょう。あのような色彩で仏間が荘厳されていました。大変迫力があります。そういうのがみんな一軒一軒にあるらしいのです。そこにちゃんと朝お参りして、帰ってきたらまたお参りしますと言います。三〇歳ぐらいの青年がですよ。仏教国なんですね。彼と話しをしていますと、一緒に行っていた女子学生が何かの話をきっかけに、彼に輪廻転生を信じているかと尋ねました。彼は「当たり前です。人間はみんな生まれ変わり死に変わります」と、ごく当然のこのように答えました。彼らは現在でも、生まれ変わり死に変わ

するのだから、しっかりと人生を送らなくてはいけない、だから朝晩仏様にお参りするのだというように考えているようでした。

大昔から今に至るまで生まれ変わり死に変わりしてきて、その間に経験した、それを仏教では「業(カルマ)」と言いますけれども、わたしたちが行った行いが、いわばエネルギーとして、私の心の一番奥深いところにあるアーヤ識の中に蓄えられていると考えるのです。その「業」のエネルギーが次の世界へまたわたしたちを導いていくと考えるのです。「諸趣」とは生まれ変わり死に変わりする世界です。六道輪廻というふうに言いますが、その六種の世界です。悪い方から順番に数えます。「地獄」は何となくわかるでしょう。「嘘ついたら閻魔さんに舌を抜かれるぞ」とか、みなさんも言われてこられたでしょう。私などは何枚舌があっても足りないと思いがすが、それから「餓鬼」。「餓鬼」というのはいつもお腹を空かし喉を渴かしている生き物。「畜生」は動物。昆虫もここに入ります。ゴキブリもカエルも「畜生」の中に入ります。牛や犬やブタはもちろんそうです。「阿修羅」、あるいは「修羅」。「修羅場」と言ったりしますが、「阿修羅」というのは、戦い、戦争、喧嘩、争いごとが好きでたまらない生き物がある、そういう世界。その上が「人間」の世界。それから「天」、神々の世界。インドの神さんはわたしたち日本人にとっては馴染みが深いですね。皆さんもよくご存知の神さんたちです。弁財天。弁天さん。私の大好きな映画「寅さん」の葛飾柴又の帝釈天。四天王と呼ばれる神々など、そういうのが「天」です。そういう境涯を「業」のエネルギーによって生まれ変わり死に変わりしていると考えられます。その生まれ変わり死に変わりしていく世界を現し出しているのもアーヤ識ですし、その世

界において、わたしたちが見たり聞いたりしているもの、それもアーラヤ識から現れ出てくるのであると言います。

——アーラヤ識の名前の由来

今、わたしたちは人間として生きて、人間として色々な行いをしていますが、その行いは全部、一つ残らずアーラヤ識の中に熏習くんじゅうされ、しみこんでいきます。そうやってしみ込ませられたものが種、「種子」としてアーラヤ識の中に貯えられます。そしてその貯えられた種子が次には活動を起こし色々なものをわたしたちに見させていく。そしてわたしたちが見たり聞いたりする世界を現し出していく。ですから、今こうして私が見ているのも、私のアーラヤ識が、その花を現し出している、そういう花として見させているのであり、みなさんお一人お一人が花をご覧になっていますが、それもみなさんお一人お一人のアーラヤ識が見させているのだと言うのです。ですから、わたしたちは同じ花を見ているつもりですが、本当は違うものを見ているのだと言うのです。だんだん訳が分からなくなつて、眠気を誘うような話しになっているかもしれないですが、何となしにそういう気がしないわけでもないでしょ。

私は、犬が好きですが、一七年間飼っていた犬が死にました。最期は人間と一緒にすね、死に際は。一年間ほど痴呆症になって、足腰が立たなくなつて死んでいきました。ずっと私は犬を飼ひ続けてきました。休暇になると、犬と一緒に一時間から一時間半くらい歩きます。いろんな辛いことがあると犬に語りかけます。ですから私の犬は何でも知っていたと思います。「このおっ

さん何を言ってるのかな」というような顔をして見ていましたが。シロという名でした。シロは落ちこぼれの犬だったので。どこかで捨てられていて畜犬センターへ投げ込まれていたのです。それを私が拾ってきたのですが、よほど恐い経験をしたのでしよう、道路に出ると歩けないのです。しょうがなのでいつも家内の自転車の買い物かごの中に、彼を入れて散歩に出るので。私の村から自転車で一〇分ほど行ったところに山があります。その山の中に行くときと安心するのが走り回ります。ですから散歩にはそこにも行くのです。一年ほどするとかなり大きくなりました。体重が一九キロから二〇キロくらいになりました。大型とまではいきませんが、かなり大きいのです。買い物かごに収まりきらないようになりました。自転車に乗っけていかなないとまだ道路が歩けない。山までは嫌でも自転車で行かないとしようがない。どうしようかと思いました。買い物かごへ無理矢理乗せることにしました。彼を買い物かごの前のふちに腰をかけさせるのです。後足を中心に入れさせておいて、私がハンドル持って、彼を私の方に向けて、私の肩の上に彼の前足をかけさせるのです。そして彼の胴体の横のどこから顔を出して覗くように前を見ながら山まで行くわけです。なんともなさない格好です。村を出るまで門徒さんに見つかると、私がバカなことをして遊んでるように思われますから、大急ぎで村を出ます。隙を狙うようにして、山へ自転車を飛ばして行くのですが、そういう時に限って誰かと出会います。門徒さんのおばあちゃんがばつと見て、ビックリしたんでしよう。目がこんなになってるんです。「あれ！ ご院さん、何しよってんですか」「何って犬の散歩に……」「また冗談ばっかし」冷や汗をかきます。…そういう情けない犬だったので。

子どもでも動物でも一緒かもしれませんが、情けない愚かな子どもほどかわいい。かわいいんですよ、ともかくね。それでも少しずつ慣れさせているうちに、ようやく道を歩くことができるようになっていきました。家内が、ご飯をやる時に、「お手」とか「ちんちん」とか言って芸を覚えさせようとしたんですが、いくら教えても覚えません。「バカな犬ねえ」と言います。私もそう思っています。ひとに「バカな犬ねえ」と言われると腹が立ちます。「何を言うか、かわいいじゃないか」「だって「お手」も覚えなのよ」「そんなこと覚えなくてよろしい、自由奔放がよろしい」。私は、子どもの教育も苦手なものですからほっておいた方ですが、犬はともかく少しは普通の犬なみにしようと、とにかく山に連れて行っては歩かせていました。私にはかわいい、いい犬なのです。ところが家内には、間抜けな愚かな犬だとは思えない。だからよく愚痴を言います。「かわいいじゃないか」「かわいくない。最近はずの顔がご院さんに似てきたたようよ、何かボーっとして……」。しかし私にとってはかわいい。

大学からの帰りは、姫路駅から自坊まで歩いて帰ります。二〇メートルほど手前まで帰って来ると何かでわかるんですね。何か気配を感じてもう鳴いてるのです。そうなたらますますかわいじゃないですか。「ああ、私の帰りを待っていてくれてる」。帰っても家内は「あ、帰ってきたの」というような顔をしています。やがて息子と娘が反発するようになって、家の中が暗くなったことがあります。大学に行けば上の先生たちからは「小谷は生意気で協調性がない」などと思われて冷ややかな目で見られる。なにもかもうまく行かない。大学へ通うのが切ないように思える日もありましたが、彼がいてくれるものですから、家に帰るとすぐに散歩をします。す

ると気が落ち着きました。「君も落ちこぼれの犬で大変やろうけどね、お父さんも大変なんや」などとしみじみと彼に語りかけながら散歩をするわけです。そうして彼の存在は、私にとつてはなくてはならないもの、本当に心の安らぎを与えてくれる唯一のものと思えるようなときが何年か続きました。かけがえのない存在に思えました。しかし家内から見たらしょうがない犬です。ですから同じように犬といっても、全然違うわけです。私が見ている犬と、彼女が見ている犬とはまるっきり違います。何が違うかという点、それは価値が違うのです。

「もの」には必ず価値があります。それはわたしたちがものに与えている価値です。私が見ている価値づけられているものです。「もの」は、そういう価値付けという点を外しては存在しません。どんなものも、私の価値付けでもって見たものがそこに存在するわけです。それが「もの」です。あらゆるものが私のアーラヤ識が現し出したものであるというのはそういうことを意味します。

唯識説のすごいところは、私のアーラヤ識の中には、生まれてから今の私になるまでの経験だけではなく、何度も何度も生まれ変わり死に変わりして経験した、それらの種子が全部貯えられていると言うところです。ですから、私が「もの」を見る目は、一朝一夕にできたものではありません。私の心の中には、私が思い図ることができないほど、深い、重いものがいっぱい蓄積されているのだと言うのです。ですから、わたしたちは、物事は勝手にどうとでも受け取れる、とか、「もの」は思いようだ、などと言いますが、そうではないのです。「もの」はどうとでも受けとれる、などと考えるはいけななのです。心には深くに貯えられたものがあり、そこから世界を

見ているのですから。そういう心で親を見、そういう心で子どもを見、そういう心で友だちと接しているのですから、見方の違いや意見の違いが生じて当然なのです。いろんな争い事が出てきたり、食い違いが出てきて当たりまえなのです。私は「もの」を正しく見ているつもりでいますが、「もの」をあるがままに正しく見るなどということは、そう簡単にできるものではないのだということをお教えようとしているのです。

どうして「もの」をあるがままに受け止めることができないか。それは私の心がそれだけ奥深いものを持つてゐるからです。そういう深い心を通してしか「もの」を見ることができないのです。その危険性を知っていないと、自分は、正しく「もの」を見ている、正しく受け止めていると思つていますが、そうではない、ということをお話としていっているのでしょね。唯識説がアーヤ識という奥深い心の存在を説くにはそういう意味があるのだと思います。

——輪廻転生の主体としてのアーヤ識

アーヤ識は、いま述べましたようにわたしたちにいろんなものを見せているものでもありません。迷いの世界をいまここに現し出させているものなのですが、それと同時に次の世界へ生まれさせて行くのもアーヤ識である、と唯識学派は言います。レジメに「輪廻転生の主体としてのアーヤ識」と記しているのは、そのことです。これが唯識説が他の学派から批判されることです。「仏教は「無我」を説くではないか」と。「無我」の「我」というのは、今の言葉で言えば「魂」と呼ばれるようなものに近いかもしれせん。

日本人は、死ぬと魂が死体から抜けていって、四十九日の間は軒先きとかどこかそこらあたりを漂っていると云ったりします。そして線香を絶やしたらいかんとか言うでしょう。どうして線香を絶やしたらいかんかと言いますと、それは『瑜伽師地論』や『俱舍論』に説かれていることに因っているのだと思います。「真宗」では言わないことです。「瑜伽師地論」や『俱舍論』の中では、その魂のようなものは死んでから四十九日の間に、必ず次の境涯に生まれていくと考えられています。一番短い人の場合は初七日の内に生まれ変わる。最初の七日の内に生まれ変わります。そうでなければ、二七日、三七日ないし七七日のどこかで生まれ変わるというように考えるのです。ですから「七日参り」といって七日毎に中陰法要のお参りをするでしょう。その間の存在のことを中陰とか中有と呼びます。次に何に生まれ変わるかわかりませんが、死んでから生まれ変わるまでの間を繋ぐ存在、連続させる存在を中陰とか中有と呼びます。中有は何を食べ物にしているかと言いますと、ガンダ、香を食べ物としてしているとされています。そこから線香を切らすなど言うようになったのです。死んだ人がいつ帰ってきてもいいように、お腹を減らしていたらいつ来て食べてもいいように、線香をずっと切らさないようにと言いつつ出たのです。しかし「真宗」はそういう教えに基づいている宗派ではありません。浄土經典の中ではそういうことは言われていません。宗派によって、そういうふうにおやりになる宗派もあるでしょう。それはそれでいいのですが、「真宗」の場合は、亡くなったらお念仏の力で浄土に生まれて行きます。「六道輪廻」の世界には生まれて来ません。

時々、お葬式した後、火葬場の方へ行きますと、お年寄りの方が「今度はいいところに生まれて

来いよ」と言われたりしているのを聞きますが、「真宗」の場合では、「お浄土へ生まれるんやで」と言わないといけない。「いいとこ」というのは、もしかしたら人間のお金持ちの所へ生まれて来いよと考えて言っておられるのであれば、それは困るなあと思わしめようかなと思わないでもありませんが、それはそういう場合でもありません。いくら私がバカだからといってもそこまでは言わない。

「真宗」の場合は、日頃お念仏を唱えておられる人は、そのお念仏の力によって必ずお浄土へ生まれて行くのだと教えられます。ですから「六道輪廻」の世界には生まれ変わったりしないのです。「真宗」以外の場合は、「六道輪廻」の世界に生まれ変わる間、中有として彷徨っていますから、お腹減らしてたら線香の煙をあげないとあかんから、線香の火をきらすわけにはいかないんですよ。しかし「真宗」の場合には、そのようなことをすれば足を引張るようなことになりません。亡くなった方はお浄土へ行こうとしているのに、もう一回輪廻の世界に帰って来いと言うことになります。

七日参りに門徒さんのお宅にうかがっていると色々なことがあります。「ホトケは生前色々家族を困らせました。パチンコや競馬や女やアホなことばかりして家中を困らせましたから、あんな人はお浄土へ行ってもらっては困る」というようなことを言われる場合もあります。息子さんが「ご院さん、親父はどこへ行ったんでしょね」「そら、お浄土に行かれたんや」「え、あんなんが?」「あんなんがって、自分のお父さんやろ。そういうふうに言うものやない。君はお父さんがどこに行けばいいと思ってるのか」「あんなんは地獄やと思うで」というような話し

をすることもあります。

「それでも君のお父さんも僕がお参りした時には一緒にお参りしてお念仏を称えておられた。だからお浄土に行っておられると思うよ。君もそう思っちゃんとお参りしてくれんと困る。お参りをしてお念仏をあげる、そうしたら必ず自分がお念仏をあげたそのことによってお浄土へ行くんやからね。君自身もそういうふうを受け止めなあかんのやで。仏さんは勝手に仏さんになるのと違う。君がそうやってお父さんのことを、自分の人生を生きていく時に、あれも困った親父やっただなあ……って思うやろ。僕も横から見とって、もう少しまともに生活された方がええがなあと思ったこともあった。それでもね、人生っていろいろあるからね。お父さんもお父さんで、まともに生きたいと思っておられたかもしれん。しかしそういうふうにしかな生きられなかつたということもあつたかもしれない。そういうように、念仏を称えながら、お父さんの人生のことを思い、君の人生のことを考えるところが、生き残った者のすることやと僕は思うよ」というような話をしながら七日参りのお勤めをします。

そのお父さんにはどこか寂しいところがある、家族に疎んじられるようなところがありました。しかしそういう人生を送っていかざるを得なかつたということがあるのでしよう。そのことを一つの教えとして私たちが受け止めていくということが大事なことではないかと思えます。どいうふうに生きていたって、悲惨な生き方をしろ、極道の生き方をしろ、いい生き方にしろ、それぞれに私たちにはその人の人生から教えられることがあります。その人が亡くなることで教えられることがある。亡くならないと教えられられないことがあります。死から学ぶというこ

と、それが大事です。それが人間のすることです。人間しかできないことです。

死ぬことから学ぶということは大変大事なことです。死なないと……と言うと語弊があります。教えられることがある。いくら良い父親でもそうです。私にとっては父は大変いい父親でした。私はこんないい加減な息子ですから、いい加減なことばかりしているものですから、しょっちゅういろんなことを言われました。父が生きている間は、また文句を聞かされるのかと思っ、しばらくの間は愚痴を聞いておいてあげよう、というぐらいに思っていました。しかし死なれてみると、よくわかります。父の小言が生きてきます。「あの時はああ言うとなん」ってね。何かの折につけていろんなふうに教えられることがあるでしょう。そういうことが人間としては大事なことだと思います。それで私たちはいろんなことを学んでいきます。そういうふうにして教えてくれる存在が仏さんです。仏さんというのは教えてくれる存在です。それが私にとって亡くなったといった人が仏さんになって下さるといことです。ですから、四十九日の間は、真宗門徒にとっては、亡くなった人を仏さまとして受け止める期間だと思います。中陰法要の折にはいつも次のようなことを言います。「亡くなられた人とはこれまで一緒に生きてきたので、亡くなったからといってすぐには仏さんとして受け止めることはできないでしょう。それは難しいことです。けれども、この七日参りの間に、練習しましょう。七日毎に私か息子が参って来ますからね、あなたも後ろで参ってください。亡くなった方のことを思い出していろいろと考えてください」。

四十九日の間はそのようにして亡くなった方を仏さんとして受け止めていく期間です。お浄土

へお参りになったというように受け止めていく期間です。それが真宗の教義に沿ったお勤めの仕方だと思えます。宗派によつては、線香を切らさないようにして供養をする。それはその宗派の教義に沿った一つのシステムですから、それでいいのでしょうか。それを真宗門徒がするのは奇妙です。池坊のお花を習っているのに未生流のいけ方がいいからといって、それを持ち込むとお花ではなくなるでしょう。お花の作法はよく知りませんが、きっとそうでしょう。ですから「真宗」であれば「真宗」、「真言宗」であれば「真言宗」のやり方を、しっかりと筋を通してやっていくのが大事なことです。

かなり話がそれました。元に戻しましょう。唯識説では、生まれ変わり死に変わりしていくものがアーラヤ識であると言います。釈尊がお生まれになった頃のインドの思想界では生まれ変わり死に変わりするものは、サンスクリット語(インドの言葉)ではアートマン、漢訳して「我」と呼ばれるものと考えられていました。アートマンが生まれ変わり死に変わりするのだと、そう考えていました。それを釈尊は否定して、そのような我は存在しない、無我であると教えられました。無我を説くことに仏教の思想の大きな特徴があります。だに唯識学派の人はアーラヤ識というものの存在を認めている。そういうものを認めれば、釈尊が否定しようとした靈魂、魂、アートマンと同じものを認めるといふ過ちを犯すことになるではないか。仏教ではなくなってしまうのではないかという非難が起りました。中観学派、あるいは有部の人々から非難が投げかけられて論争がなされています。

唯識学派の人は、そうではないと言います。アートマンとアーラヤ識とは違つたと反論します。

何が違うのかと言うと、アートマンは常に変化をしない存在とされているが、アーラヤ識は一瞬一瞬変化する存在であると言います。

「常一主宰」という言葉がありますが、常に変化しない存在。私の中に、常に変化しない確固たるものがあり、それが私のすべての機能を支配している存在がある。それがアートマンであるというのが仏教以外のインドの大半の思想家たちの認めることです。しかし、確固たる変化しない存在が、私の本質であると思うから、それに対する執着、「我執」が生じ、それによって人間は悩み苦しむことになるのだというのが、釈尊が「我」を否定された理由です。わたしたちが自分というものについつい執着してしまふ。オレが、オレが” というように思ってしまう。その一番元になるのが、私の中に変化しない確固たる「自己」が存在している、とする思い込み、「我執」である。その我執を除くために、釈尊は、そういう常一主宰たるべき我が、本当はわれわれが実在するかのように思っている幻影に過ぎず、実在するものではないことを説明し、「無我」である、アートマンは存在しないことを論理的に説明しておられます。

唯識説では、アーラヤ識は、我とは違って刻々変化していくものだと云います。アーラヤ識は、縁起している存在であると言います。アーラヤ識を、例えば、私が花を見る、という一つの事実が生じている場合について考えてみます。その場合、この花というものを、私のアーラヤ識が、いまここでこうやって私に見させている。いわば、現し出しているわけですが、私が花を見ると、花を見たという事実が、すぐに私のアーラヤ識に影響を与えます。見ることも、聞くことも、全ては行い・「業」・経験です。見ることも、聞くことも、思うことも、考えることも全部、

私はその瞬間、瞬間いろんなことを経験しているということは、「業」を働かせているということとです。それは全部、私のアーヤ識に影響を残していると、そう考えます。先程言いましたように、この花も、誰が見ても、いつ見ても、決して同じように見えるようなものではない。私との関係の中で、この花はこの花として存在している。シロが私にとって非常に大事なものとして存在したように、この花も私との関係の中で、私にとって「こういう花として見えている」のです。そしてその「こういう花として見た」という経験が私のアーヤ識の中にその影響(種子)を残してゆきます。ですからアーヤ識は一瞬一瞬その影響を受けて変化しています。

私がいまここで見ている花は、私の心が現し出したものです。私との関係の中でこの花はこの花として存在します。私がこの花を見れば、それはまた私に影響を与えます。花を例にするとあまりよくわかりただけかもしれませんが、映画を観たり音楽を聴いたりする場合のほうがわかり易いかもしれません。いい映画を観たり、いい音楽を聴いたりしたら自分が変わっていくのが分かります。昔は高倉健の映画を観ると、みんな肩をいからせるようにして映画館から出てくると言いました。私は影響されやすいですから、すぐ映画の主人公になったような気分になって出てきたものです。恋愛映画で格好のいい男の映画を観たりすると、自分がその男になったような気持ちで街を歩きます。女の子たちが全部自分のことを見ているような気がしたものです。

絵を見ることもそうでしょうね。絵をよくご覧になられた人が、私と一緒に一枚の絵を見に行かれたとします。その人は、私のように絵がほとんどわからない者が見るのとは随分違うものをご覧になっているのだと思います。

ピカソの絵などは私にはその意味が全然わかりません。私は初めて見た時ビックリしました。これはなんだと思いました。大学一年生の時に、ピカソ展が京都で開かれました。同級生に絵をよく知っている友人がいて、「行こう」と言うのです。私は気が進みませんでした。ついで行きました。やはりいいとは思いませんでした。友人はピカソの絵について色々説明してくれましたが、結局私には全く理解できないで終わりました。絵が楽しめるかどうか、絵の中に価値を見出せるか否かということは、見る人によって全然違います。絵の価値がわかるようになるには見ることを重ねていかなければなりません。見た経験が蓄積されて、それが絵の価値を見出せるようにしていくのです。このように絵の価値と絵を見た経験とは相互に依存する関係にあります。それを縁起の関係と言います。

元から本来そういうものとして、誰にとっても、いつでもそういうものとして客観的に絶対的なものとして存在しているものは、何一つ存在しません。必ず私との関係の中で物事は存在するというのが「縁起」ということです。アーヤ識も縁起している存在です。私にとって存在するものは、アーヤ識からそういうものとして現われ出たものです。そして、そういうものとして見たことが、私のアーヤ識の中に影響を与えます。ですからアーヤ識は一瞬一瞬変化しているものなのです。変化しないオートマンとは違うと唯識学派の人は反論します。そしてアーヤ識が変化するものであるということが「聞法」ということにとって、とても大事なことです。

悟りの世界の顕現

唯識説では「聞熏習」ということを重要なことと考えます。教えとして聞いたことをアーラヤ識の中へしみ込ませていくこと、それを「聞熏習」と言います。聞いたことは必ず私の中へしみ込んでいきます。いまこうしてお話を聞いて頂いていることも、みなさんのアーラヤ識の中に、一刻一刻しみ込んでいきます。それが唯識学派の人が大切だというところですよ。ですから教えを間違つて聞くと、その教えが変なふうにしみ込んでしまいます。釈尊の教えられた言葉、それはお経として残されています。「有見」という、小乗の人たちの聞き方は、釈尊のお経の言葉をその通りに聞いて、覚えて、暗記をしていけば、正しく理解できているという間違つた思い込みです。お経の言葉を正確に学んで覚えていけば、釈尊の言おうとされたことが理解できて、悟りが開けると考えました。しかし唯識学派の人は、そうは考えません。それは単に言葉を覚えていただけだと批判しました。自分の考えや解釈で理解したことを自分の心の中に蓄えているだけだと批判しました。そういうのを法に対する執着、教えに対する執着として、「法執」と言います。

自分は、釈尊の言われたことを勉強して、正しく理解できたのだと思い込んでいます。そういう思い込みを心の中に熏習しているだけだと、そういうように批判をするのです。自分たちは正しく理解できていると思って、そういう頭で法を聞いているだけだと。そうではなく、自分の思い込みを取り外して、釈尊が本当に言おうとされたことを聞き取る、そのように努めないと、釈尊

の本当に言おうとされたことは聞き取れないと言います。言葉の表面の意味だけ理解してわかったと言っても、それは釈尊が本当に言おうとされたことを聞き取ったことにはならない。自分の解釈、思い込みを取り除いて聞く。言われたことを本当に聞き取る。そういう努力をしないと本当の意味は聞き取れない。だのに、小乗の人たちはそういう努力をしていない、というのが瑜伽行派の人たちの批判です。そういう批判は唯識論書だけではなく、「大乘經典」の中にも出てきます。

【維摩経】の中では、釈尊のそうそうたる弟子たち、舍利弗とか、目連とか、阿難などの、十大弟子と呼ばれるような高弟たちは、釈尊の言われたことを、自分は正しく理解できていると思いい、そういうつもりになっている人として描かれています。その高弟たちを、維摩居士という在家の信者さんが徹底的に批判します。例えば、ある時、舍利弗が坐禅をしていました。瞑想をしていました。そこへ維摩居士がやってきて「君は何をしているのか」と尋ねます。「何をしていますか、見ての通り、坐禅をしているではないか。ちゃんと釈尊が言われた通りに、自分は姿勢をこうして、目線もこの方向に落として、釈尊が言われた通り、言葉通りに守って坐禅をやっているのだ」と答えます。「それは違う、君のはただ言葉だけ、釈尊が言われた言葉通りにやっているだけだ。そんなものは坐禅じゃない」。坐禅というものは、今でならパチンコ屋にいたってできる。教えられた姿勢の通りに坐ってやれば、坐禅だと君は思い込んでいるけれども、それは違う。坐禅というのは、そういうように心を集注させることによって、逆に心を自由にさせることなのだ。わたしたちの思い込みを取り外して、思い込みから心を解放して自由にすることな

のだ。どうやって物事があるがままに心の中へ受け入れていくか、そのための方法なのだ。坐るのはそのための方法であって、坐っていればいいというものではない。大事なものは心が解きほぐされて、物事がストレートに心に入ってくる。それが坐禪の本当の仕方なのだと行って批判します。『維摩経』の中では釈尊の高弟たちの、教え(法)に対する思い込みがそういう仕方です。批判されていきます。

高弟たちは、釈尊が説明された教えを忠実に聞いて、その通り覚えて、その通り実行しているつもりでいます。しかし、そういう教えを通して、釈尊が本当は弟子たちにどういうことをして欲しいと言われているか、そのことが正しくわかっていないというのが、維摩居士の批判なのです。唯識説では、だからこそ、瑜伽行を通して法を聞きとらないと、法は本当には理解できませんと説くのです。釈尊が、本当に何をおっしゃりたかったかということを常に考えながら聞くという、それが大事だということです。ただ、経典に説かれているから、その通りに理解して、表面の意味だけがわかればそれでいいという理解の仕方はダメだということです。

唯識説では、教えを正しく「聞熏習」することによってこそ、わたしたちにお浄土という世界が現れ出てくると言います。物事の本来有るべき有り方をしてる世界、それが「浄土」だと言います。例えば、ここにいま見えている一つの空間(世界)がありますが、これは自分の思い、「アーラヤ識」を通して見えている世界です。もし、その私の思い、分別を全部取り払って、この世界を有るがままに見ることができれば、そこに「浄土」が現れ出て来るといように説明します。そのために、聞熏習をするのだと教えます。

真宗では私たちは「南無阿弥陀仏」と称えます。それには、まずその謂われを知らないといけない。何故、念仏を称えるのか。呪文のように「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えていけば、それでいいということではありません。念仏を称える意味は「大無量寿経」に説かれていますが、それは阿弥陀仏の本願として述べられています。阿弥陀仏はわたしたちに願いを懸けられます。どれだけ自分の中に自己中心の思いが根深いか、それを一度でよいからしっかりと見つめて欲しい。そしてその自己中心の思いが、自分の努力では決して取り除くことができないほど根深い強いものであることを知ってほしい。そこまで自分を徹底して見て欲しい。そのことがよく分かれれば「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えてほしい、自分の名前を呼んで欲しい。「ああ、阿弥陀さん」と呼びかけて欲しい、そうすればその人を救わないではおかない、という願いを立てておられます。

「南無阿弥陀仏」と称える意味は、「ああ、阿弥陀さん」と言わざるを得ないような自分であることを知ることです。「ああ、お母さん」と思わず言わないとしようがないような状況があります。それと同じように「ああ、阿弥陀さん」と呼びかけざるを得ないような、そこまで自分の腹の中にある嫌な面、自己中心性、自分の欲望、ゴタゴタした嫌なもの、そういうのを全部しっかりと見通して欲しいという願いです。そしてせめて一回でいいから「南無阿弥陀仏」と心の底から自分の名前を呼んで欲しい。そうすると必ず君には道が開けてくるからと呼びかけておられるのです。「大無量寿経」というお経は、阿弥陀さんがわたしたちにそのように呼びかけてくださっているお経です。まずそのことをしっかりと知っておいて、その上で、日常生活の中で繰り返

し、その呼びかけを思い出していくのです。何故そういう呼びかけがなされているのか。何故自分にはその呼びかけが必要なのかを考えていくのです。それが私にとっては「聞熏習」ということです。

みなさんのお宅にはお仏壇があるでしょう。その前で亡くなった人のことを思い出して、「南無阿弥陀仏」と称えて合掌されるでしょう。そうして、亡くなった人々のことを思い自分のことを考えていますと、先程言いましたように「ああ」と言わざるを得ないような時があります。生きていく間には、あのようにも言ってくれた、このようにも言ってくれたが、その言葉をしっかりと聞いたかどうか。いろんなふうに自分に接してきてくれたけども、そういう願いに答えるような接し方ができたかどうか。そういうことをお仏壇の前で思われるでしょう。そうすると、自分がそういう人たちのことをそれほど重要なものとも思わず、大切なものとは考えてこなかった、ということが見えてきます。自分のどこかに自分を守ろうとする思いがあり、自分を第一にして歩いて来てしまった、そういうことに残念ながら気付きます。「ああ」とため息をつかざるを得ないようなことがあります。そういう人たちが亡くなっていった姿を思いながら、「南無阿弥陀仏」と称えざるを得ないところがあるでしょう。それを繰り返すということです。そうすることによって、亡くなっていった人たちが語りかけようとしてくれたことが、少しわかるようになります。「ああ、親父はこういうふうに言いたかったんだらうなあ」と、父の気持ち少しわかるようになってきます。そういう方法でしか、私にはその人の思いが伝わらない。

釈尊の言われたかったことも同じことではないでしょうか。そのようにして自分の生き方を見

ながら、自分がどれだけ大変なものを自分の中に、アーラヤ識の中にため込んであるかということに気付くことによってしか、釈尊が、本当に自分に言おうとされたことが聞き取れないのです。そうやって聞き取っていくこと、それが聞熏習ということですよ。聞熏習ということによって、自分の思いを離れて亡くなっていった人の思いを聞き取るのです。

自分の思いを離れないと、ひとの話は聞き取れません。自分は自分として努力しているのだからというのが、父の生きている間、私が思っていたことです。父もいろいろと小言を言ったり忠告をしてくれますが、私は私で、姫路から京都まで毎日通って、疲れ果てることであっても何とか一家を支えてやっているのだから、という思いがずっとありました。ですから、父がいろんなふうに考えて言ってくれるのだから、その通りには聞き取れない。しかしそういう自分の思いが父が亡くなることによって離れていきます。「南無阿弥陀仏」と称えていると、自分の思いがほぐれていきます。そうすると、「あっ」と気がつきます。「ああ、親父がなあ……」「ああ、お袋がなあ……」というようにして気がつきます。そういうようにして父や母の言いたかったことが聞き取れていきます。それが私にとつての「聞熏習」であろうと思います。そうして聞き取ったことが私のアーラヤ識の中に、その折々にしみ込んでいきます。そういうことを何度も繰り返すことによって、父が言いたかったことが次第に聞き取れるようになってきます。それはちやうど、絵心がなかった人が、良い絵を何度も見ることによって、その人のアーラヤ識の中へしみ込んでいって、良い絵を見た時に、その絵の語りかけていることが見えてくるようになる。それと同じことです。

音楽もそうですね。いい音楽を聞きはじめると、音楽のよさが聴き取れるようになります。毎日聴いていると、益々いい音楽が好きになっていきます。初めはいいと思わなくても、いいと思うようになってきますね。繰り返し聞くことによって、意味が聞き取れるようになります。そういうことを「聞熏習」と言います。真宗ではそれを「聞法」と言つて、大変大切なことと考えます。聞熏習ということは、真宗門徒にとつてだけでなく、他の宗派の方にとつても、それぞれの経典が語りかけていることを、どのようにすれば自分の糧として聞き取っていけるかということをお考え頂く時には、きっとヒントになるような考え方ではないかと思えます。そのようなことを考えて今日は「唯識と聞法」という題でお話をさせて頂きました。

最後までご静聴頂きましてありがとうございます。

二〇〇六年一〇月一四日